

待降節第2主日 12月第2週説教 2013.12.8

## 差し迫った神の怒り

マタイ3章1-12節

そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

---

待降節を英語では「アドベント Advent」と言います。もともとはラテン語から来た言葉で、その意味は「到来」です。伝統的に待降節第2、第3主日の

福音では毎年、洗礼者ヨハネに関する箇所が読まれます。

## 1. イエスには先駆者が必要だった

ヨハネは最後の預言者といわれています。イエスはある時、聖書をわたしを証しする書といいました。イエスを証言する意味においてヨハネは預言者です。しかし預言するものは過去にもいく人もいました、地上のイエスにとって必要だったのは信仰の先駆者だったのではないのでしょうか。後世のわたしたちはイエスに残された時間が少ないことを知っています。当時のユダヤ教を改革を叫ぶ人はヨハネ以外にも多くいたことでしょう。ただ一人ヨハネだけが荒野で叫んでいたわけではないはずです。数多くの信仰者の中でヨハネが選ばれたのはなぜなのでしょう。

## 2. ヨハネはユニークだった。

ヨハネは聖書に洗礼者ヨハネ（バプテスマのヨハネ）と記されています。聖書には同じ名前の人物がでてくるので区別するためにあだ名をつけることもあります。彼のユニークな一面をあらわした名といえます。それは彼が「洗礼(バプテスマ)」といういままでのユダヤ教にはなかった新しい儀礼をもちいて宗教活動をしていた点です。テキストはその活動の内容を紹介しています。

**エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。(3:5-6)**

きょうのテキストに続いて13節以下にイエスがヨハネから洗礼を受けたことが記されます。だれもが疑問に思う点があります。それは、どうしてイエスはヨハネから洗礼を受けたのか、神の子イエスは洗礼を受ける必要などないのではないかという事です。キリスト教神学はイエスがヨハネから洗礼を受けたのは人間と同じ地平に立つためだったと解釈します。神の子であり

ながら人の子としての人間と同じ立場に立つため、低みにおりたという説明です。

### 3. 洗礼という形式

イエスがこの世で成し遂げたことは「十字架と復活」に尽きます。それを成し遂げるためにイエスは地上の生涯を駆け抜けたといえます。金曜日に十字架につけられ、日曜日の朝に復活した。三日間のためにイエスは人となり苦しみを受けました。

この「十字架と復活」に焦点を当ててみると「イエスの洗礼」の意味が浮かび上がります。ヨハネのユダヤ教刷新運動の火をイエスの活動の導火線にするために必要としたのではないか。洗礼はそのための手段としてあったのではないだろうか。宗教的な意味合いだけではなく実際の社会を変革するための行動をイエスは起こす必要がありました。ヨハネがイスラエルの全土から民を集め洗礼活動を実行しているその火をイエスは必要としていたのではなかったのかとおもうのです。

**わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。(3:11)**

イエスは罪の赦しを病人、未亡人、貧しい人など多くの人に与えたことが聖書に記されています。しかし聖書にはイエスが洗礼を施したとは書いてありません。ヨハネもまたイエスは自分の水による洗礼ではない方法「聖霊と火」で洗礼をすると証言します。洗礼は聖書によれば洗礼者ヨハネが始めたものです。それをキリスト教徒の入信儀礼としてイエスの死後、教会が採用したという歴史的な経緯があります。この観点から見れば、洗礼は否定されるものではありませんが、克服する課題として受け止めるものでもあります。

### 4 さいごに

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「娘の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。」（3:7）

終末の神の怒りは“免れることが不可能である”と、洗礼者ヨハネは説教しました。同じように私たちも“叱られないようによい子になりましょう”というレベルの信仰に留まることはできません。

私たちは洗礼者であり、イエスの露払いでもあるヨハネの説教を聞きながら、キリストの十字架こそがまさに神の怒りそのものであったことにあらためて気づくのです。

-----